

湖東南地域の民家の特性

吉見 静子

家政学部住居学科

(2002年9月12日受理)

The Character of MINKAs in Southeast Areas of Shiga Pref.

Department of Housing and Design, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu City, Japan (〒501 - 2592)

YOSHIMI Shizuko

(Received September 12, 2002)

序

本論は中近世古道調査の一環として平成12年度に行った御代参・杣街道沿いの民家調査資料を中心に、既調査および13年度に行った日野町の調査資料を加えて、17棟の民家を対象に湖東南地域の民家の特性を明らかにするものである。

1. 調査地域の概要

御代参街道は東海道土山宿（滋賀県甲賀郡土山町）と中山道愛知川宿（滋賀県愛知郡愛知川町）を結ぶ脇街道であり、その間には土山宿を出て、鎌掛宿、石原宿、岡本宿、八日市宿の宿場町があった。そのうち、古い民家が残っているのは鎌掛宿とその周辺である。

日野町鎌掛宿は日野町の南部に位置し、三方を鈴鹿山脈とその端山の丘陵に囲まれた農業地域である。

嘉永年間（1848～1865）の鎌掛宿には、町家44軒のうち、旅籠（旅館）が13軒あり、そのうち本陣級の旅籠・脇本陣級の旅籠がそれぞれ1軒ずつあり、木賃宿（簡易旅館）は3軒であった。土山宿と鎌掛宿の間の距離は短

いが、その間に険しい笹尾峠があったため、峠を越える前後の休憩所として、必然的に旅籠屋が多くなったと思われる。

杣街道とは甲西町三雲で東海道から分岐し、伊賀柘植へと至る道であり、伊勢・伊賀から近江に入る重要な道であった。またの名を伊賀道・伊勢道とも呼ばれる。主な街道経路は西の起点甲西町三雲・貴生川・甲南町森尻・深川市場・深川・寺庄・甲賀町高野・大原市場・田堵野・油日・五反田・上野・余野、そして三重県阿山郡柘植町へと至る。

水口町三大寺三本柳は杣街道に沿って街村が形成され、江戸時代中期より町場化し、江戸時代後期に杣川沿いの在郷町としてさらに発展を見せた。『滋賀県物産誌』（1880）では農業136軒で、製茶・採薪・炭焼などを副業とし、商業50軒で行商をしていたとされる。

甲南町深川市場は滋賀県甲賀郡甲南町の北部、杣川の東岸の平坦地に位置する。杣街道と伊賀道とが交差する交通の要衝となり、杣谷一帯の物資の集散地としての位置を保っていた。

江南町寺庄は滋賀県甲賀郡甲南町の北東部に位置し、北・東は甲賀町に接しており、南

西に流れる杣川沿いに延長1.6kmにわたる集落である。江戸時代、寺庄は在町には認定されていなかったが、『滋賀県物産誌』には戸数115軒すべてが農家であるが、「傍ら茶を製シ或八太物荒物等ノ商事其他古着商ヲ以テ京阪ノ地ニ行商ヲ事トスルアリ」と記入、すべて農業でかたわら製茶を行うほか、京阪地方を行商する者もいたとされている。

2. 民家の形式

大半は農家型民家であるが、街道沿いに形成された集落(町)であるためか、なかには町家型民家もみられ、両型とも切妻造瓦葺であるが、鎌掛では草葺寄棟造があり、また、破風の小さい入母屋造もある。

(1) 農家型

平入りで、四間取整形型を基本とし、規模を広げ六間取整形型になる例も見られる。鎌掛では四間取整形型で、周辺の農家に見られる形式であり、その平面構成と構造との関連からみて四間取整形Ⅱ型(湖東型)であるといえるが、なかには、岡 司郎氏宅にみられる四間取整形Ⅰ型(湖南型)も混在していた

といえる。

なお、外観の意匠は町家的で、格子や虫籠窓が設けられ、屋根軒裏は漆喰で塗り固められている。また格子や前面に見える差鴨居や桁行方向の梁などは紅色に塗られている。

草葺民家の小屋組は合掌組で、梁間が二間と小規模な例がみられ、屋内空間を拡大するために四周に瓦葺の庇を付けている(岡崎ふみ氏宅)。この形式を瓦葺にした例が藤井達雄氏宅である。

背面の だいどこ と にわ 境に野物の梁があり、建設当初は野物の梁だけで建具はなく開放されていた。その後、薄鴨居を入れ、建具をたてたといえる。

(2) 町家型

一列通りにわ型を基本とし、一列三室通りにわ型あるいは一列二室Γ字土間型である。中規模町家として、二列六室通りにわ型がある。現在は、前面を土間とし、通りにわ部分に商業用の床上スペースを設け、二列Γ字土間型である。

また、妻入民家には、正面二階のほぼ中央に窓を開け、窓の上には瓦葺の庇をつけ、ま

表1 調査家屋 表

	家屋名	所在地	職業	建設年代	屋根の形式	復元平面構成	梁×桁	小屋組	
1	野沢光利氏宅	鎌掛	雑貨商	江戸末	切妻造瓦葺平入	四間取整形Ⅱ型	2×6	和小屋	野物の梁
2	岡寄健治郎氏宅	鎌掛	染織業	江戸末	切妻造瓦葺平入	四間取整形Ⅱ型の類	6×4	登梁	野物の梁
3	岡崎友次氏宅	鎌掛		江戸末	寄棟造草葺平入	四間取整形Ⅱ型	2.5×4	合掌組	野物の梁
4	岡崎ふみ氏宅	鎌掛		江戸末	寄棟造草葺平入	四間取整形Ⅱ型	2×3.5	合掌組	野物の梁
5	岡沢雄一氏宅	鎌掛	旅籠屋	江戸末	入母屋造草入平入	四間取整形型	2.5×5	登梁	離れ・絵図(天保12)
6	岡 司郎氏宅	鎌掛	問屋	江戸後期	寄棟造草葺平入	四間取整形Ⅰ型	3.5×6	合掌組	
7	岡仁右衛門氏宅	鎌掛		江戸後期	入母屋造草葺平入	四間取整形Ⅱ型	3×5.5	合掌組	野物の梁
8	岡忠兵衛氏宅	鎌掛		明20年代	切妻造瓦葺2階平入	四間取整形型	3×6		
9	西岡儀左衛門氏宅	鎌掛		江戸末	切妻造瓦葺平入	四間取整形型	3×5	登梁	野物の梁
10	谷村 衛氏宅	三本柳	造酒屋	明治初期	切妻造瓦葺平入	四間取整形型	4×5.5	登梁	野物の梁
11	鶴飼弥一郎氏宅	三本柳	旅籠屋		切妻造瓦葺妻入	一列二室 型	3×5	登梁	
12	鶴飼一彦氏宅	三本柳		明6移築	切妻造瓦葺平入	五間取食違型	4×6	登梁	
13	鶴飼 猛氏宅	三本柳	菓子屋	江戸末	切妻造瓦葺妻入	一列二室 土間型	5.5×5	登梁	
14	木村一雄氏宅	深川市場	醸造業	江戸末	切妻造瓦葺平入	二列六室通りにわ型	4×5	登梁	野物の梁
15	望月一重氏宅	寺庄	酒屋	江戸末	切妻造瓦葺平入	四間取整形型	3×6.5	登梁	野物の梁
16	藤井達雄氏宅	寺庄		嘉永3移築	切妻造瓦葺平入	四間取整形Ⅰ型の類	2×5		野物の梁



図1 断面模式図

た、出格子を付けている例もある。構造形式は登梁構造で、土間を含む主要な生活空間を主構造体の中におさめ、押入や仏間などの部分は葺下ろしの空間部分に含まれる。二階の屋根裏は間仕切り、居室、あるいは、客室として使用している。

3. 規模の拡大

(1) 庇の付加

合掌組の梁間が2間と小規模な民家では庇を大きく架けることにより、室内空間を確保している。その例は岡崎ふみ氏宅にみられる。

(2) 桁行方向に拡大

敷地の間口が広い鎌掛や寺庄に関しては桁行方向側面に拡大する。その例として岡伊右衛門氏宅があげられる。現在六間取で奥座敷に続いているが、柱の風化後や構造材の新しさから、元は四間取であった。望月一重氏も同様である。

(3) 背面に拡大

間口に限りのある三大寺や深川市場では背面に部屋を加えている。その例として木村一雄氏宅があげられる。棟木を上げ、屋根勾配を緩くし、小屋組の前面側は新束を立て母屋を支えているが、背面側は元の登梁に束をたてて母屋を支えている。また前面には庇をつ

けているが、背面は葺き下ろしている。棟を高くして葺き下ろすことによって、背面に室を付加し、より大きな空間としている。

4. 小屋組の移行

今回の調査によって、草葺から瓦葺へ的小屋組の移行をみることができる。

(1) 草葺民家

小屋組は合掌組で、梁間を2間としている。上屋柱を抜いて、差鴨居と野物の梁を延ばし、屋内を広くしている。その例として岡崎ふみ氏宅がある(模式図1)。

(2) 合掌くづし

1) 合掌くづし1

小屋組の梁間2間の例では、合掌組の梁と桁に束を立て、棟木の高さを低くし垂木をかけて瓦葺としている。元の庇の位置より高い位置に新しい庇を設けている。その例として野沢光利氏宅がある(模式図2)。

2) 合掌くづし2

元の合掌組の梁間は2間であるが、前背面に半間ずつ外へずらして束をたて、桁を支え、登梁をかけ、瓦葺としている。外壁を半間張り出させることによって、瓦葺のして完成された形式に近づけている。その例として西岡義兵衛氏宅がある(模式図3)。

(3) 瓦葺民家

1) 背面葺下ろし

湖南地域に多く分布する四間取整形Ⅰ型と類似している瓦葺の例では登梁構造で、前面のみに庇を設け、背面の屋根は葺下ろしである(模式図4)。

2) 1)の次段階の例として、背面の葺下ろしを庇に変えたものである(模式図5)。

3) 小屋組の梁間を拡大した例で、棟の位置は前・背面の部屋境の間仕切りと同列で、大黒柱は屋根裏まで伸びない。まだ室部分全体が主構造体の中にはおさまらず、背面には庇がかかる。瓦葺の民家としてはまだ完成されておらず、おさまりも良くない。間仕切部分には野物の梁は用いず、各部屋境に差鴨居をいれるようになる(模式図5)。

4) 前・背面の部屋境の間仕切りと棟通りが一致し、棟を中心に前・背面の部屋を均等に配置して、バランス良い形にしている。室はすべて主構造体の中におさまり、縁の部分にのみ半間の庇が架かり、瓦葺きの構造がほぼ完成した形になっている。その例としては、望月一重氏宅、鵜飼一彦氏宅、岡寄健治朗氏宅、谷村衛氏宅があげられる。まず望月一重氏宅であるが、登梁構造で、小屋組の規模は梁間3間半、桁行き7間半で、梁間の規模が少し大きくなっている。前面に半間、背面に1間の瓦葺の庇をつけていて、定型に近い。鵜飼一彦氏宅は、登梁構造で小屋組の規模は、梁間4間、桁行6間である。もとは寺であったこともあって、多少特殊な構造をしているが、前背面に半間の庇をつけていることや、

二階部分も大きくとられていることから、瓦葺小屋組として完成されているといえる。岡寄健治朗氏宅は、登梁構造で小屋組の梁間も4間と大きい。前背面の縁部分に半間の庇をつけていて、同様に瓦葺小屋組である。最後に谷村衛氏宅であるが、登梁構造、梁間4間で、前背面に半間の庇をつけている。また大黒柱が地棟まで通っており、庇をつけている軒桁に2間ずつ梁間方向に梁をかけていて、全体的にバランスのよい構造となっている(模式図6-8)。

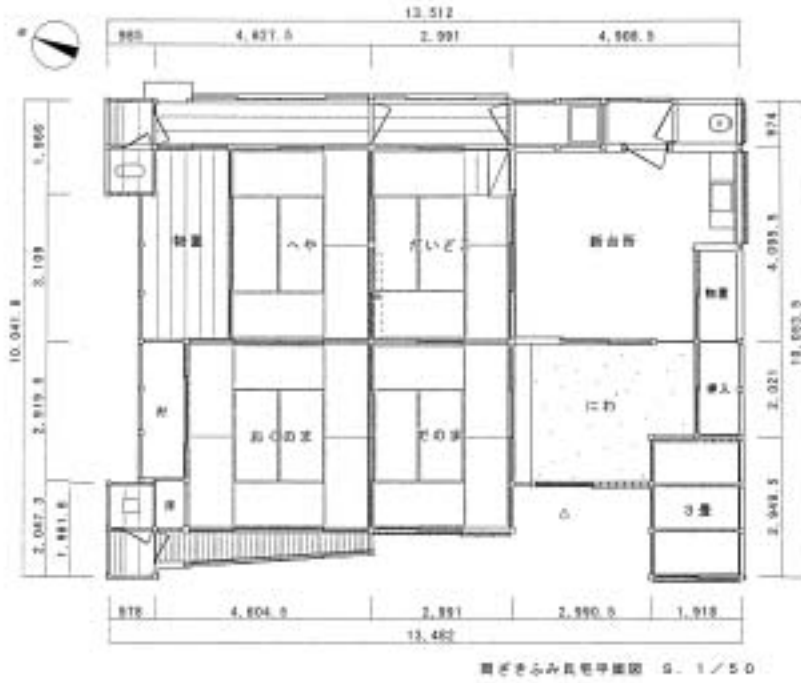
結

この地域の民家は多くは農家方で四間取整形型を基本とし、家業により、入り口土間を広くとり、前土間型の要素を取り込み、外観には町家型の格子戸などの要素を付加している。

また、建設年代が江戸後期から明治まで幅があり、加えて、合掌くずしや規模の拡大などの改造も多く見られ、草葺民家から瓦葺民家への構造上の経過をみることができる。

参考文献

- 5) 吉見静子他 中山道 中近世古道調査報告書2 滋賀県教育委員会 平成8年3月
- 6) 吉見静子他 八風街道 中近世古道調査報告書4 滋賀県教育委員会 平成13年3月
- 7) 吉見静子 蒲生町史資料編 民家 蒲生町 平成13年3月



平面図



断面図

図2 岡崎ふみ氏宅図面



平面図



断面図

図3 野沢光利氏宅図面



平面図



断面図

図4 藤井達雄氏宅図面



平面図



断面図

図5 鵜飼弥一郎氏宅図面



平面図



断面図

図6 谷村 衛氏宅図面